

令和7年度 全国学力・学習状況調査 鳥取県の結果について

1 令和7年度全国学力・学習状況調査のポイント

(1) 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、
- ・全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
 - ・学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
 - ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 結果公表の見直し（文部科学省発表資料から）

○調査結果の公表・提供について、令和6年秋に全国知事会で実施されたアンケート等で挙げられていた課題は以下のとおり。

（主な課題）

- ・生徒の振り返り効果を高めるため、結果通知時期を早めてほしい。
- ・全国との平均正答率との差や順位のみが独り歩きしており、教育現場の混乱を助長しかねない状況である。
- ・授業改善に生かすものであるという調査の目的・趣旨がしっかり伝わるような公表の在り方を求める。
- ・結果公表に際し、都道府県・指定都市で十分に分析ができないスケジュールとなっている。

○これらのことを踏まえ、国による結果公表が、以下のとおり3段階に分けて行われることになった。

7月14日（月）	結果公表①（正答率・IRT（※）バンド分布などの全国平均）
7月31日（木）	結果公表②（全国データに基づく分析結果）
8月以降（秋頃目途）	結果公表③（都道府県・指定都市別データに基づく分析結果）

※IRT（Item Response Theory）：項目反応理論。児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論。なお、詳細は6ページ【参考1】参照。

○このように3段階に分けた目的は以下のとおり。

- ・児童生徒の学びへの還元を最優先に、学校への結果返却の時期を前倒しとする。
- ・全国データに基づく分析結果をより効果的に発信する。
⇒これまでとは同時期に全国データに基づく分析と都道府県・指定都市別の平均正答率が公表されていたため、後者に注目が集まり、本調査の目的に基づいて国が発信しているメッセージが十分に届かない状況も見受けられた。
- ・都道府県・指定都市別データの公表までに各都道府県・指定都市の主体的な分析期間を確保する。
⇒都道府県・指定都市が自らの調査結果を公表する時期については、公表データを主体的な分析に基づいて説明することができる準備が整ったタイミングとすることが望ましい。

※令和7年6月6日付けの文部科学省からの通知では「各都道府県・指定都市教育委員会において、自らの調査結果を分析するに当たっては、(略) 個々の問題等に着眼して学習指導上の課題を把握したり、質問調査の結果と合わせて総合的に分析したりすることが重要である。」とあり、「これを踏まえた主体的な分析により、(略) 教科調査の全体の平均正答率・スコアのみならず、(略) 調査結果を多面的に解釈することができる示し方となるよう工夫することが期待される」と示されている。

※令和7年7月24日に実施された、結果公表②に係る文部科学省の記者レクにおいても、都道府県・指定都市教委に対して、調査結果を多面的に解釈することができる示し方となるよう依頼していること、都道府県・指定都市教育委員会による公表日及び公表内容については教育委員会に委ねており、主体的な分析を行った上で、8月以降に公表されることも想定していることなどについて、説明されている。

以上のことを踏まえ、今回の本県の調査結果においては、各教科の特徴的な問題や課題等を示しました。

また、教科調査の詳細な分析や今後の取組については、市町村（学校組合）教育委員会と連携して、検討・実施していく予定です。

(3) CBT（※）での実施

「中学校理科」のCBT方式では、IRTが採用され、生徒1人あたり公開問題10問と非公開問題16問が出題されています。公開問題には全日程に共通する問題6問と、実施日により異なる問題4問があります。非公開問題は幅広い内容・難易度等から出題され、生徒ごとに異なる問題を解いています。

※CBT（Computer Based Testing）：コンピュータ使用型調査

2 本県の実施状況

(1) 小学校6年

実施校118校(小学校111、義務教育学校6、特別支援学校1)

教科等	国語	算数	理科	質問調査
人 数	4,357	4,360	4,362	4,450

(2) 中学校3年

実施校61校(中学校50、分校2、義務教育学校6、特別支援学校3)

教科等	国語	数学	理科	質問調査
人 数	3,949	3,954	3,945	3,959

3 全国における「教科に関する調査」の結果のポイント(文部科学省発表)

(全体)

都道府県別の平均正答率・スコアのばらつきの状況は、狭い範囲に収まっている。

(国語科)

目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることに引き続き課題が見られた。また、自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことに課題が見られた。

(算数・数学科)

数直線上の分数を捉えることや、百分率を倍を使って捉え直し表現することに課題が見られた。また、あらかじめ書かれている図形の証明を評価・改善することに課題が見られた。

(理科)

電気が通る回路を実際の生活の中でつくることに関する理解に課題が見られた。また、化学変化を原子や分子のモデルで表すことに課題が見られた。

4 本県における調査結果の概要

【教科に関する調査】

(全体)

正答数の分布については、どの教科でも全国と同様の傾向が見られた。

(国語科)

文章の要旨を捉えたり、構成を工夫して書いたりすることに課題があると考えられる。

(算数・数学科)

基礎的な数の概念理解や、問題を統合的・発展的に考えることに課題があると考えられる。

(理科)

観察・実験を行いながら、実感を伴った知識の習得ができていると考えられる。一方で、探究の過程に課題があると考えられる。

【質問調査】

- ・「自分には、よいところがあると思う」「先生が自分のよいところを認めてくれている」「困りごとなどについて先生や学校にいる大人に相談できる」と回答した児童生徒の割合が、それぞれの質問調査開始以降、最も高い値であった。
- ・授業の内容はよくわかると回答した児童生徒の割合が、どの教科も前年度(理科については令和4年度)を下回った。児童生徒が「わかった」と実感できる授業づくりを推進していく必要がある。

5 本県における各教科の特徴的な問題 () 内は全国平均 (公立) ※問題の詳細は別紙参照

(1) 国語

<小学校>

- ① 学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる問題 (あついで)
(知識・技能) 鳥取県正答率: 72.4% (72.1%)

- 出題された漢字を正しく書き、使うことができる児童が多い。
- 漢字そのものを正しく書くことができるだけでなく、同音異義語から文章に合う漢字を選ぶ力が身に付いていると考えられる。

- ② 事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができるかどうかをみる問題 (思考・判断・表現) 鳥取県正答率: 48.7% (51.3%)

- 資料を読み、要旨を正確に把握することに課題があると考えられる。要旨を把握するためには、文章の各部分だけを取り上げるのではなく、文章全体の構成を捉えることが重要である。
- また、文章全体の構成を捉えて要旨を把握するためには、叙述を基に、書き手が、どのような事実を理由や事例として挙げているのかなどに着目することが重要である。

<中学校>

- ① 事象や行為を表す語彙について理解しているかどうかをみる問題 (知識・技能) 鳥取県正答率: 63.2% (61.0%)

- 出題された語句の意味を正しく理解できている生徒が多い。
- 語句の量を増すとともに、話や文章の中でどのように使用されているかについて考えることができていると考えられる。

- ② 読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる問題 (思考・判断・表現) 鳥取県正答率: 27.0% (30.1%)

- 文や段落の長さ、文や段落の役割、段落の順序、語順などが適切であるかなどをみることに課題があると考えられる。
- 書いた文章を推敲する際には、伝えようとするものが伝わるように、読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることが重要である。

(2) 算数・数学

<小学校>

- ① 異分母の分数の加法の計算をすることができるかどうかをみる問題 (知識・技能) 鳥取県正答率: 81.4% (81.3%)

- 異分母の分数の加法の計算についての知識及び技能が身に付いている児童が多い。
- 異分母の分数の加法を計算する場合には、分母の最小公倍数を用いて通分し、計算することが必要となる。ここでは、例えば、 $\frac{1}{2}$ と $\frac{1}{3}$ の分母の最小公倍数である 6 を用いて通分し、 $\frac{3}{6} + \frac{2}{6}$ を計算するが、その技能が十分に定着していることが考えられる。

- ② 小数の加法について、数の相対的な大きさを用いて、共通する単位を書く問題 (知識・技能) 鳥取県正答率: 68.1% (74.1%)

- 0.4 は 0.01 の 40 個分と見ることができなかつたり、 $0.4 + 0.05$ についてそれぞれの単位を揃える必要があることを理解できず誤って 0.1 と解答したりしていることが予想され、数の相対的な大きさを用いて、共通する単位を捉えることに課題があると考えられる。
- 小数の加法について、数の表し方の仕組みや数を構成する単位に着目して数の相対的な大きさについて理解し、既習の整数の加法に帰着できるようにすることが重要である。

<中学校>

① 素数の意味を理解しているかどうかをみる問題（知識・技能）

鳥取県正答率：19.7% (31.8%)

- 1から9までの自然数の中から素数をすべて選ぶ問題である。1を素数と考える生徒が多くいることから、素数についての概念理解に課題があると考えられる。
- 素数についての概念理解は、約数や倍数などの整数の性質を捉え直すことにもつながるため、確実に定着させる必要がある。

② 統合的・発展的に考え、条件を変えた場合について、証明を評価・改善することができるかどうかをみる問題（思考・判断・表現）

鳥取県正答率：31.7% (36.3%)

- 平行四辺形ABCDの辺CB、ADを延長した直線上に $BE=DF$ となる点E、Fを取っても、四角形AECFは平行四辺形となることの証明を完成する問題である。証明を行った後に、条件を変えて統合的・発展的に考え、評価・改善することに課題があると考えられる。
- 図形の性質を考察する場面では、予想した事柄が成り立つことを証明したり、条件を変えて共通する性質を見いだすなど統合的・発展的に考察したりすることや、問題解決の過程や結果を振り返って新たな性質を見いだすことが大切である。

(3) 理科

<小学校>

① ヘチマの花のつくりや受粉についての知識が身に付いているかどうかをみる問題（知識・技能）

鳥取県正答率：75.0% (70.7%)

- 花のつくりや受粉についての知識が身に付いている児童が多い。
- 理科では、科学的な言葉を使うことや、科学的な言葉を使って説明する場面を設定することが大切であり、実際に植物を栽培し、観察・実験を行う中で科学的な言葉を使用することで、実感を伴った知識の習得ができていますと考えられる。

② 発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる問題（思考・判断・表現）

鳥取県正答率：57.4% (62.0%)

- 実験を計画する際に、必要な条件を正しく制御した解決の方法を発想できていないことが課題であると考えられる。
- 理科における問題解決の場面では、自然の事物・現象に影響を与えると考えられる要因を予想し、その予想を基に解決するための実験の方法を計画する。さらに、実験に関する全ての条件を明確にし、図や表などに整理して条件を制御することが重要である。

<中学校>

① 電熱線で水を温める学習場面において、回路の電流・電圧と抵抗や熱量に関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる問題（知識・技能）

鳥取県正答率：53.4% (51.9%)

- 直列回路と並列回路における回路全体の抵抗と熱量に関する知識が身に付いている生徒が多い。
- 回路全体の抵抗の求め方や熱量の求め方を習得することのみを目的とするのではなく、これまで授業で行われた観察、実験を想起したり、これまで学習した知識を活用したりして、発生する熱量と直列回路・並列回路における合成抵抗とを関連付けて概念的な理解を深めることができていますと考えられる。

② 身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定できるかどうかをみる問題（思考・判断・表現）

鳥取県正答率：36.4% (46.2%)

- 見通しをもって科学的に探究をするためには、疑問や見いだした問題から解決するための課題を設定することが大切である。
- 「課題の把握」の段階で生徒が疑問や問題を見だしやすい自然の事物・現象を提示することが重要である。その上で身の回りの事象から生じた疑問や問題が解決可能かどうかに着目し、科学的な探究の課題を自分の言葉で表現する学習場面を設定する必要がある。

6 質問調査の結果概要

(主な成果)				
・「自分には、よいところがあると思う」と回答した児童生徒の割合が調査開始以降、最も高い値であった。「先生が自分のよいところを認めてくれている」「困りごとなどについて先生や学校にいる大人に相談できる」と回答した児童生徒の割合もそれぞれの質問調査開始以降、最も高い値であったことから、各学校で教職員が児童生徒の良さを認め、良好な人間関係を築いていることにより、自己肯定感が育まれていることが考えられる。 ・授業における一人一台端末の活用が小中学校ともに昨年度より進んでおり、端末を家庭で利用できるようにしている学校の割合も高まっている。				
(主な課題)				
・授業の内容はよくわかると回答した児童生徒の割合が、どの教科も前年度（理科については令和4年度）を下回った。児童生徒が「わかった」と実感できる授業づくりを推進していく必要がある。 ・昨年度に引き続き、授業で自分の考えが上手に伝わるよう、工夫して発表することに課題が見られた。「自分の考えを持ち、工夫して表現する子どもの育成」のための指導のポイントについて示した資料「鳥取県教育の重点」を活用し、授業改善を推進していく必要がある。				

※上段：小学校、下段：中学校

項目	内容（○：児童生徒質問調査、●：学校質問調査）	R7 値	R6 値	昨年度比
生徒指導	○自分には、よいところがあると思う	86.8 85.0	83.9 82.7	+2.9 +2.3
	○先生は、自分のよいところを認めてくれていると思う	94.5 93.5	92.8 92.3	+1.7 +1.2
	○困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる	70.8 75.0	67.3 71.5	+3.5 +3.5
	○国語の授業の内容はよくわかる	79.9 74.9	85.7 82.0	-5.8 -7.1
授業改善	○算数・数学の授業の内容はよくわかる	75.2 65.3	79.5 71.4	-4.3 -6.1
	○理科の授業の内容はよくわかる（※R4 値、※※R4 値との比較）	88.5 72.5	88.5※ 78.3※	0.0※※ -5.8※※
	○授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している	58.8 59.0	59.5 59.9	-0.7 -0.9
	○学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている	77.8 74.7	79.9 80.5	-2.1 -5.8
	○学級の友達・生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていた	83.5 85.3	85.5 87.7	-2.0 -2.4
	○授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器を使用している（ほぼ毎日）	43.6 69.3	22.2 47.1	+21.4 +22.2
ICT 活用	●自分の考えをまとめ、発表・表現する場面では、児童生徒一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器を使用させている（週1回以上）	70.1 82.8	71.5 73.3	-1.4 +9.5
	●児童生徒一人一人に配備された PC・タブレットなどの端末を、家庭で利用できるようにしている	91.5 89.7	91.4 78.3	+0.1 +11.4
	○将来の夢や目標を持っている	83.8 65.2	81.8 66.5	+2.0 -1.3
ふるさとキャリア教育	○地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う	80.5 75.7	83.6 76.8	-3.1 -1.1
	●コミュニティ・スクールや地域学校協働活動等の取組によって、学校と地域や保護者の相互理解が深まった	97.5 91.4	93.1 91.7	+4.4 -0.3
	●全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用した	95.7 93.1	97.4 90.0	-1.7 +3.1
研修・校内研修	●個々の教員が自らの専門性を高めるため、校外の各教科等の教育に関する研究会等に定期的・継続的に参加している（オンライン参加を含む）	78.7 81.0	76.7 76.7	+2.0 +4.3
	●教員が授業で問題を抱えている場合、率先してそのことについて話し合った（学期に数回程度以上）	94.0 89.7	94.8 75.0	-0.8 +14.7

7 教科調査の状況

教科調査平均正答率（％）・平均 I R T スコア（中学校理科のみ）

	国語		算数・数学		理科	
	本県（公立）	全国（公立）	本県（公立）	全国（公立）	本県（公立）	全国（公立）
小学校6年	65	66.8	55	58.0	56	57.1
中学校3年	52	54.3	44	48.3	49.0	50.3

※文部科学省は、平成29年度より小数点以下を四捨五入し整数値で公表している。

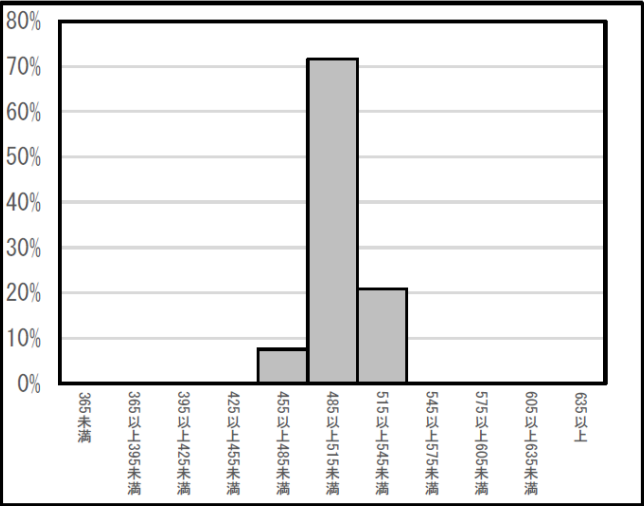
※ I R T スコアとは、 I R T に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すもの。

【参考１】 CBT方式及びIRTについて

- ・令和7年度調査では、「中学校理科」において、ICT端末等を活用しオンラインでテストを受ける「CBT方式（※1）」が初めて導入され、複数日時で分散実施された。
 - ・IRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものを「IRTスコア」、IRTスコアを1～5の5段階に区切ったものを「IRTバンド」という。
 - ・IRTスコア及びIRTバンドは、難易度の高い問題に正答していると高めに、難易度の低い問題に誤答していると低めに算出される。
 - ・これまでの悉皆調査では、各年度の問題の難易度を厳密に調整する設計とはしておらず、年度によって出題内容も異なることから、異なる年度の結果を単純に比較することは適当ではない。しかし、十分な数の問題を準備し、CBTで複数の問題セットを配信する方式をとる場合は、今までと同程度の問題数は調査期間終了後に公開することとし、それ以外の問題については適切に漏洩防止策を講じた上で非公開とし、次年度以降も出題する設計とすることで、IRTに基づき、各教育委員会や学校でも年度をまたいで児童生徒の学力を比較することも可能となる。
 - ・令和8年度は「中学校英語」及び「児童生徒質問調査」、令和9年度以降は全ての調査がCBT方式により実施予定。また、「教科に関する調査」のCBT方式では、IRTが採用される。
- ・本県においては、今回のCBT方式での実施に係るトラブルについては、特になかった。

【参考２】 都道府県・指定都市における中学校理科の平均IRTスコアの状況

IRTスコア分布グラフ（横軸：IRTスコア分布、縦軸：割合）



全国（公立）の 平均正答率	全都道府県市（公立）中、 最高平均IRTスコア 【全国との差】	全都道府県市（公立）中、 最低平均IRTスコア 【全国との差】
503	533 【+30】	465 【-38】

全都道府県市数	全都道府県市（公立中）の 平均IRTスコア	全都道府県市（公立中）の中央値	全都道府県市（公立中）の標準偏差
67	503	503	14.2

※都道府県は指定都市を除く。全国（公立）の平均IRTスコアは整数値で表示している。